

川内潤さん

●NPO法人となりのかいご代表理事

「高齢者虐待を防ぐには、介護離職をしないこと」

高齢者虐待が後を絶たない。その多くは、介護離職によって経済的困窮に陥り、精神的に追い詰められたことで起こる。川内さんは企業でセミナーを開き、「介護離職は親孝行ではない」と訴える。それが虐待をなくす一番の近道なのだという。

●聞き手……編集部

企業に向いて
介護の話をする

「なぜ、高齢者の虐待防止に取り組むようになったのですか。」

川内 10年くらい前の話ですが、神奈川県にある私の実家では、父が訪問介護サービスを提供する会社を経営していました。母は訪問入浴の看護師でありケアマネジャーだったのですが、元来困っている人を放っておけない性格で、昼夜問わず、頼ってくる人のお世話をしているうちに、仕事とプライベートの線引きができなくなりまし

た。多忙によるストレスからアルコールに逃げるようになってしまい、さまざまな問題行動を起こすようになったのです。

そのとき私は上京して会社勤めをしていましたし、弟2人はまだ学生でしたので、父が1人で母の面倒を見ていました。そのうち、母の状態は日に日に悪化し、お酒を飲んで暴れ、川に飛び込んだり、父の愛車をボコボコにしたりしたそうです。ある日母から「私、死ぬね、ごめんね」と留守番電話が入っていたので、びっくりして実家に飛んで帰ったら、母は痩せて焦燥しきっていました。残念ながら、父から母に対しての暴力、暴言があったようでした。

そのとき、福祉や介護に携わる家なのに、どうしてこんなことになってしまうのだろうと、憤りとともに疑問を持ち始めたのが最初のきっかけです。

その後、私は会社を辞め、父の会社で訪問入浴の仕事を始めました。そこで知ったのは、長く介護を受けている高齢者の中には、かなりの確率で虐待を受けている人がいることでした。

「どのようところで虐待に気付いたのでしょうか。」

川内 私たちは、入浴時に服を脱がせま

ので、故意でなければ絶対に付くはずのないあざや傷に気が付きます。一週間服を取り替えていないとか、4畳半の部屋に閉じ込められているような介護放棄も度々見掛けました。虐待の最中に遭遇したこともありますし、不審な状況で亡くなるケースもありました。一度、虐待を受けた高齢者が緊急一時入所で保護された様子を見たこ

とがありますが、彼らの、とても人のものとは思えないような目、人を信じていない目は、今でも忘れられません。

それから私は、なぜ虐待が起こるのか、起こる前に止めることはできないのか。そんなことをずっと考えながら過ごしていました。

そして、まずは虐待の実態を発信するこ

とから始めようと思い、2008（平成20）年に、特に家族からの高齢者虐待問題に取り組む団体「となりのかいご」を設立し、2009（平成21）年に「介護殺人を食い止める一言を考える討論会」を開催。その内容をまとめた冊子を発行しました。これが私たちの団体の最初の事業です。

しかし、「高齢者虐待を何とかしたい」というミッションを持ったのはいいのですが、継続的な事業として、どう打ち出していったらいいのか考えがまとまらず、悩み、試行錯誤してきました。

そして、今ようやく形になりつつあるのが、自ら企業に出掛けていって介護の話をする仕事です。最初は飛び込みで、「無料で結構ですでお話しさせてください」と言い、無理をお願いして企業でお話をさせていたっていました。現在はいくつかの



Profile

●かわうち・じゅん●

1980年、神奈川県生まれ。上智大学文学部社会福祉学科卒。社会福祉士、介護支援専門員、介護福祉士。2008年、高齢者虐待問題に取り組む団体「となりのかいご」を設立。2014年NPO法人認定。代表理事に就任。『介護で家族を憎まないために』自費出版。会社員向け介護セミナー等を行っている。

企業と契約を交わし、報酬もいただいています。

家族だけの介護は「親不幸」

—どのような話をするのですか。

川内 最も訴えたいメッセージは、「介護のために仕事を辞めるといふ生き方だけではないでください」というものです。

介護のやり始めは、親孝行のように感じるかもしれない。でもそれが10年、15年、20年と続いたら、最初の優しい想いは薄れてしまい、親孝行ではなくなっています。

「介護・看護のため」に離職した人は年間約10万人ですが（2016（平成24）年就業構造基本調査）、仕事を辞めれば当然収入はなくなります。生活が苦しくなると、人は孤立し、精神的に追い込まれ、それについては虐待につながってしまいます。

象徴的な話があります。以前、訪問入浴をさせていただいた高齢の女性が、私にこんなことを話しました。

「こんな状態で生きてるのが嫌だ。早く死にたい。私が生きているせいで、息子も嫁も傷ついているのがよく分かる。嫁も息

子も仕事を辞めた。私は体が動かないことでいら立って家族に八つ当たりし、ますますもない飯をまずいと言ってしまう。息子夫婦が日々疲れていくのがよく分かる。私は、せつかく自分の腹を痛めて産んだ子どもを傷つけるために生まれたわけじゃない。だから早く死にたいんです」

この方は誇張して言っているのではなく、本気で自分がいなければいいと思っているように感じました。愛情でスタートした介護の結果が、親に「死にたい」とまで言わせることになってしまった。とても悲しいことです。

—介護は経験しないと実感が湧きません。

川内 そうですね。ほとんどの人が介護について何も知らないことに驚かされます。「介護保険って、会社に申請するんですよね」「税金を支払ってれば、後は役所が全部やってくれるんでしょう？」「病院に入院したら最後まで見てくれるんですよ」。一つ一つ聞いていくだけでも恐ろしくなり、これが現実なんだと痛感しました。しかしあらためて考えてみると、企業に勤めている人は地域とはほとんど縁がな

く、今でこそ国は在宅医療を推進していますが、いまだに家族は病院で亡くなるのが当たり前で、自宅で看取することは少ないでしょう。そうすると、人がどのように衰えて死んでいくのかは実感が湧きませんし、そこに至るまでの介護など、そもそも自分のライフプランの中に入れていないのです。一部の報道によってつくり上げられた、介護はつらい、汚いというイメージが先立って、誰もが介護のことを考えることすらつらいのです。考えないでいるうちに突然親が倒れ、パニックに陥るのです。

—こちらからアプローチして情報を伝えていくことは大切です。

川内 私たち福祉の専門職も、相談されることが当たり前になっておりますが、本当は、相談される前にアプローチすることも必要不可欠です。地域包括支援センター等では、地域の人たちに向けて、健康体操や認知症の講座を開催しています。しかしその地域には、ビジネスマンもビジネスウーマンもいません。介護に関して意思決定をするキーパーソンであり、介護を抱え込み悩んでしまう可能性のある人は、地域でな



く会社にいるのです。

自分もそうですが、福祉職がキラキラしたオフィスの中に出掛けていくのは、正直言って敷居が高いです。今日も某広告代理店に行ってきましたが、やはり苦手意識を持ってしまいます。でも、実際に行ってみて強く感じるのは、「この人たちは、間違いなく介護を求めている」ということです。

介護はプロに、家族は愛情を

—「親の介護は子どもがやるべき」という世間の目や思い込みがあるので、自分たちだけで全てやろうとしてしまいます。

川内 家族の介護と違って、私たちはプロ

の介護技術を提供できます。例えば、入れ歯を抜くのはすごく難しいのです。口は動かし、大抵本人は拒否しますが、口腔ケアをやらないと、誤嚥性肺炎を起こして救急搬送されることもあるので、私たちは介護のスキルを駆使して行います。何か楽しい話をしながら笑っていたら、口が緩んだ隙にすつと抜く。これが家族にできるかと言うと、なかなか難しいと思います。私たちは感情的な結びつきが強くないからこそ冷静になつてできるのです。

親は、いくつになつても子どもの前では常に親のよるいを着ています。子どもにとって母はいつまでも尊敬する母であり、自分を形作っている一部として考えます。子どもは本当の女性としての母を知りません。そこに向き合っていけるだけの覚悟があるかどうかと考えると、相当つらいことだと思えます。介護はプロに任せて適切な距離を保ちつつ、家族は愛情をたくさん注

ぐことが大切だと思います。

介護保険の申請にもコツがあります。役所の窓口の担当者の中には、今もコミュニケーションの取り方が下手な人もいます。配慮に欠けた対応を受け「二度とこんなところに来るもんか」と怒り、行政サービスの利用を放棄してしまう人も多く聞きます。でも、こちらのコミュニケーションの取り方一つで、行政からさまざまなサービスを引き出すことができます。会社を辞めたり、時間短縮をせずとも、または遠距離介護であったとしても、プロの手を借りて充実した介護をすることは十分可能なのです。相談しやすい環境をつくるためにも、今後は企業だけでなく、自治体とも協力し合い、認知症カフェやセミナーを通して、地域の介護者への情報発信もしていきたいと思っています。

「介護殺人を食い止める一言を考える討論会」報告書
●「NPO法人となりのかいご」
ホームページから購入できる
<http://www.tonarino-kaigo.org/>